

2024年3月3日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 37 「御前に為すこと」

申命記6：10～15、ローマ9：1～5

「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト記3：14）と神さまはモーセにその名を示されました。神さまの名を呼ぶことで神さまとの人格的な交わりの中にモーセを置かれるためです。詩編にも「わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう」（50：15）とあります。神さまは、わたしたちが神さまの名を呼び、その交わりの中に置かれるため御自身の名を示されました。

しかし一方で、わたしたちは神さまの名を持つことで、自分が神さまを意のままにできると勘違いをしてしまう。神さまの名を都合よく持ち出してきては自分を装い、正当化する。それは神さまを軽んじることであって、そのような神さまの名の乱用を第三戒は厳しく戒めています。それは神さまの名を呼ばないことではありません。正しく用いれば問題ないのです。

問101 しかし、神の御名によって敬虔に誓うことはよいのですか。

答 そのとおりです。権威者が国民にそれを求める場合、あるいは神の栄光と隣人の救いのために、誠実と真実とを保ち促進する必要がある場合です。なぜなら、そのような誓いは、神の言葉に基づいており旧約と新約の聖徒たちによって正しく用いられてきたからです。

問102 聖人や他の被造物によって誓うことはよいのですか。

答 いいえ。なぜなら、正当な誓いとは、ただ独り心を探る方である神に、真実に対してはそれを証言し、わたしが偽って誓う時には、わたしを罰してくださるよにと呼びかけることであり、このような栄光は、いかなる被造物にも帰されるものではないからです。

「神の栄光と隣人の救いのために、誠実と真実とを保ち促進する必要がある場合」とあります。誠実と真実とを保ち促進するために、わたしたちは神さまの御名を呼び、御前に誓約をすることが許されています。そこに信頼関係が作られます。どのような交わりでも信頼関係が求められます。教会もそこに魂の救いを委ねるわけですから、その教会を信頼できるかどうかは問われます。春は異動の時期ですが、あるご夫妻が横浜に転居されました。新しい土地で、どこの教会に行くのかはなかなか難しいことです。幸い近くに日本基督教団の中でも同じ全国連合長老会に所属する教会がありそこを紹介しました。同じ福音理解、信仰告白に立つことにおいて初めて信頼し委ねることができるのです。また「神の言葉に基づいており」とあるように、教会の信頼関係は、やはり神の言葉、福音理解を共通のものとしているところに成り立ちます。そこで初めて様々な立場の違いを超えてお互いに信頼し合うことができるのであります。

祈禱会では使徒言行録を学んでおりますが、先日はパウロが回心後、教会に受け入れられていく箇所を読みました。パウロは教会の迫害者でした。ステファノの殺害にも関与しており、その迫害は非常に激しいものでした。そのパウロが一転、伝道者になるのです。受け入れる教会側としてもなかなか「はい、そうですか」とはいきません。はじめパウロを警戒し「皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた」（9：26）とあります。それもそうでしょう。キリスト者を見つけ出しは牢屋に入れていた人だったのです。もしや、スパイのように教会内部に潜入してきたのではないかと疑われて当然でしょう。聖書を読みますと、エルサレムで他の弟子たちと自由に行き来することができるようになるまでには3年以上かかったようです。

しかし、その間にパウロは少しずつ信頼関係を築いていきました。その信頼の土台はやはり神さまの言葉です。回心直後からパウロは福音を宣べ伝えました。「この人こそ神の子であるとイエスのことを宣べ伝えた」(9:20)「イエスがメシアであることを論証した」(9:22)とあります。「論証した」というのは、聖書から解き明かしたということです。イエスさまの福音を聖書から語り続けたのです。そこで疑いが拭われていきました。ここは重要だと思います。来る日も来る日もパウロはイエスさまの福音を確信を持って語りました。ぶれなかった。言っていることがコロコロ変わると、怪しい、信用できないということになります。でもパウロは変わらずに聖書からイエスさまの救いを語りました。

もう一つ学んだのは、信頼関係を築くことは一人ではなかなか難しいものです。迫害者であったパウロが一転、自分はキリストの弟子だと言っても「どの口が言っている」と言われるだけです。ですからそれを本人ではなく第三者が言うことが重要になってくる。聖書にも「二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである」(マタイ18:16)とあります。本人以外の誰かが証言することが重要なのです。パウロには心強い助け手がありました。アナニアは回心の直後からパウロを助けました。エルサレムではバルナバがパウロと使徒たちとの間を取り持ちました。そこに信頼関係が築かれていきました。

信頼関係をどのように築くのか。もちろんその人自身の誠実さも重要ですが、もっと大切なことは、それが神さまの言葉に基づくものであり、教会という信仰の共同体の赦しととりなしによって築かれていくということです。そのところに成り立つ新しい信頼関係がある。人間の誠実さにも限界があります。弱さや欠けがあります。失敗することもあるでしょう。でもこれを赦し乗り越えていくのが信仰なのです。その上にすべてのことは神さまの御前に為すこととして整えられていくのです。

教会でなされる洗礼も就任式も結婚式もすべて誓約が求められます。それは個人の誠実さに基づくものではなく、神さまの言葉、そしてその教会の赦しととりなしに基づいています。だから弱く欠けを抱えているわたしたちの誓いでも、神さまの御前に「正当な誓い」になるのです。それだけではありません。説教も祈りも賛美もすべて、その不確かな、欠けのある言葉を御前に真実ならしめるためにイエスさまが十字架で死んでよみがえってくださいました。イエスさまがその言葉を真実なものとして贖い、御前に届けてくださいます。

天の父よ。あなたが御子を与えて、わたしたちの言葉を真実なものとして贖い、御前に届けてくださいます。それゆえにわたしたちは御前に誓うことが許されています。どうぞわたしたちの言葉を清め、すべてのことを御前に為すこととして整え導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。